日语研究

第8辑

《日语研究》编委会 编

商務印書館

日语研究

第 8 辑

《日语研究》编委会 编

商務印書館
2011 年 · 北京

图书在版编目（CIP）数据

日语研究. 第8辑/《日语研究》编委会编. —北京：商务印书馆，2011
ISBN 978-7-100-08662-2

Ⅰ.①日… Ⅱ.①彭… Ⅲ.①日语—研究—丛刊 Ⅳ.①H36-55

中国版本图书馆CIP数据核字(2011)第215566号

所有权利保留。

未经许可，不得以任何方式使用。

日 语 研 究

第8辑

《日语研究》编委会 编

商 务 印 书 馆 出 版
（北京王府井大街36号 邮政编码 100710）
商 务 印 书 馆 发 行
北 京 瑞 古 冠 中 印 刷 厂 印 刷
ISBN 978-7-100-08662-2

2011年12月第1版 开本787×960 1/16
2011年12月北京第1次印刷 印张18¼
定价：35.00元

卷　首　语

《日语研究》第 8 辑又和大家见面了。本辑共收有特约论文 2 篇，投稿论文 12 篇，书评 3 篇，计 17 篇。内容涉及较广，涵盖了语法学、词汇学、语用学、译介学以及日语教学等领域的研究。

本辑的特约论文之一是由筑波大学沼田善子教授执笔的「とりたて詞『も』の作用域と否定」。沼田教授长期从事凸显助词的研究，取得了很多重要的成果。有关凸显助词「も」的辖域问题，前人已经做过探讨，但仍有不少尚未解决的问题。这篇文章从句法环境和语用条件的角度详细考察了表示“累加”的「も」在否定句中的辖域情况。与否定谓语共现的「も」通常情况下比否定词的辖域宽，文中称作「広作用域」(宽域)，少数情况下比否定词的辖域窄，文中称作「狭作用域」(窄域)。在主句中，「も」与否定谓语共现时通常取宽域，但是如果使用了「一緒に」则倾向于取窄域，在否定的疑问句中，「も」也倾向于窄域。然后，文章着重讨论了各种从句中的语用条件。目的从句中的窄域解释不需要特殊的条件。条件从句中的「も」解释为窄域的语用条件是，说话人要积极地意识到话语背后的命题，并主观希望达成该命题中的状况。让步从句中的窄域不需要特殊的条件。原因、理由从句与条件从句都是要通过诱导推论想象话语背后的命题，在可以解释为条件或原因、理由的连体修饰从句中，「も」的窄域解释的条件与上述条件从句和原因、理由从句相同。因此，从句中如果不带主题，而且满足假想背后的命题这一语用条件，「も」的窄域解释就是可能的。文章最后指出了该文没有涉及的其他课题，可以作为今后的研究方向。

另外一篇特约论文「現代中国語における〈変化〉事象の捉えかたと構文特徴—〈断続的変化〉と〈連続的変化〉—」由大阪大学古川裕教授执笔。这篇文章从分析“换了一个人”和“变了一个人”的区别入手，提出汉语分别用“换”和“变”来描写“离散式变化”和“连续性变化”这两种不同的认知反

应。这两种变化可以用不同的意象图式表示(文中的图1和图4),它们的不同性质使“换”和“变”呈现出不同的语法表现。“换”常用的句式是“主语+‘换’+宾语”,“换”直接接表示衣服类的名词时,这个结构可能有两种解释,如“换西服”可以指“换下西服”也可以指“换上西服”;而当“换”后接体助词“了”或者再在宾语前加数量词时,这个结构只能表示“换”后的结果。另外,“换”还用于〔换上+A〕〔把A+换上〕〔换下了+B〕〔换下来的B〕〔A和B换C〕〔A跟B换C〕[用B换A][用B换来A][拿B换出来A]等结构。另一方面,“变”常用的结构有〔主語a+“变”+目的語A〕〔主語a+“变到”+目的語A〕〔主語a+“变成”+目的語A〕["由"a“变”A]["从"a“变成”A],它与“换”不同,还可以后接结果补语(如“变红”等)或用〔“变”+“得”+状态补语〕。另外,“变”的主语常用“天气”“情况”等本身流动性的事物,而“脸色”“腔调”等则经常用作“变”的主宾语。文章结论部分指出,“换”代表的是点状数字式(デジタル風)变化,而“变”代表的是线状模拟式(アナログ風)变化。古川教授的这篇论文对我们理解认知模式与语法现象的关系很有启发性,也为我们今后描写有关的语法现象提供了一个很好的范式。

语法学论文仍然是投稿论文涉及最多的领域。本辑共收有5篇语法学方面的论文。

王亚新的“非宾格动词结构在日汉语中的表现”从非宾格动词、动词附加形式(可能态和「他動詞+たい」结构)和被动态三个方面探讨了非宾格谓词构成的句式所具有的类似的句法表现及语义特征。这些句式在日语中共同的句法表现是可以出现「が/を」的替换,而只能使用「が」或「を」还是「が/を」两者均可,体现了该句式的语义变化。汉语由于缺少词汇形态的格标记,只能通过语序和语义关系来辨认这种语义变化。尽管日汉语的基本语法结构相差较大,作者分析了大量实例后指出,两种语言非宾格动词结构还是存在着一些句法和语义上的共性。

陈风的“‘言语引用’、‘言语行为’、‘言语内容’——表示‘语言活动意义’的代表性动词「言う」的时态形式与表述功能”从表述功能的角度探讨了言说动词「言う」的四种时体形式的异同。文章的主要结论是:「言った」具

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

有表述“言语行为”的功能，而其他 3 种形式本身的功能在于“言语引用”；“言语引用”和“言语行为”这两种表述功能的差异可视为与“言语内容”产生的时间层面有关，两者的差异还表现在引语内容以及动词「言う」所涉及的语言行为方式的不同等；表述功能同样在于“言语引用”的「言う」、「言っていた」和「言っている」这三种形式的主要差异表现在引用方式和引语内容上。

黄毅燕的“「VP＋の」的自指转指与后续动词性质的关系——当「VP＋の」构成宾语成分时”是作者持续关注的日语自指转指问题系列论文中的一篇。文章根据构成宾语成分的「VP＋の」的指称性质，把后续动词分为 3 组，并利用[主体动作]、[客体变化]、[认知活动]、[动作的施行性]这 4 个参数对动词进行语义特征分析。作者通过分析大量的实际用例证明了各组动词的语义对「VP＋の」表示自指还是转指的影响，得出了一定的结论。

彭玉全的“生起相修饰成分与复合动词「V＋始める」「V＋出す」的共现”是研究副词与谓语动词共现现象的论文。关于「V＋始める」与「V＋出す」的区别，以往研究中多从复合动词的语义角度进行考察。本文则是利用大规模的语料库检索，统计出与「V＋始める」和「V＋出す」共现的生起相修饰成分的使用频率，发现了这种共现的倾向，即「突然」等表“突发性”的生起相修饰成分容易与「V＋出す」共现，而具有“预见性”的生起相修饰成分(「早速」「すぐ」「たちまち」「間もなく」等)容易与「V＋始める」共现。

刘健的“关于「(一＋V)する」型汉语动词体的研究”根据「(一＋V)する」型二字汉语动词中“一”的意义把这些动词分为 5 类，然后通过分析各类动词的实际用例，总结了它们各自的语义特征以及シテイル形式的意义。作者发现，「(一＋V)する」型二字汉语动词的シテイル形式能否实现该形式“体”的基本意义，实现何种体意义，不仅与词干中的动词性成分，也与「一」的意义用法有着很大的联系。另外，作者还基于实例，对高桥太郎(2003)的一些结论作出了修正。

本辑收录了一篇通过词汇学具体个案的分析来讨论对比语言学研究方法的论文。续三义的“「手術する」与‘做手术’、‘动手术’——汉日对比语言

学研究小议”从一位研究者在研究中使用「手術する」和“做手术”的实例出发，针对日语的「手術する」，指出了辞书的释义和研究者使用的意义的异同，分析了该词语义的历史变迁，并对相关词语进行了论述。这篇文章给我们的启示是，在分析二语习得以及误用现象时，如果只抽取一种用法进行测试，难免有失偏颇，因此应该充分考虑受试者母语的情况，这样得出的结论才比较可靠。

本辑有4篇关于语用学的论文。

彭广陆的“视点与会话中的主语隐现—以汉日语对比为中心—”一文，在作者2008年发表的两篇有关汉语和日语“视点”问题的论文的基础上，分析了两种语言主语隐现与“视点”之间的关系。文章根据具体的表达功能把汉语和日语会话体的语料分为若干小类，通过大量的实例分析了各小类中主语隐现的规律。同时，作者还举出汉日对译的文学作品和电影对白的例子，进一步说明了两种语言会话中主语隐现情况的差异。对这一差异产生的机制，作者认为可以用“视点”的差异进行解释：汉语是视点移动型语言，为了明确视点所在而经常使用主语，而日语是视点固定型语言，“视点”的默认值较高，因此可以经常省略主语。

高宁的“关于引用的本质探讨——以汉日语为研究对象”从《现代汉语词典》和『カラー版日本語大辞典』对“引用”的定义出发，提出对“引用”本质的七点思考。文章通过引证和批判文献中对引用性质的认识，着重讨论了现场语言或对话（即临场语言）在理论上是否属于引用的问题，以及将发生在未来或者说是纯粹假定性的言语活动是否与引用有关的问题。文章最后把引用的特点归纳为五点，为我们进一步探讨引用的本质提出有益的思考。

张惠芳的“试论「デハナイカ」在自然会话中的表达功能”是在作者另一篇论文（张2010）中对自然会话的「デハナイカ」进行定量分析的基础上，对语料进行定性分析的论文。作者在前一篇论文中已经提出，「デハナイカ」的“确认用法”主要实现为“提供话题和信息”的表达功能，本文中这一功能的机制可以概括为：说者在阐述自身的经历或见解时，用「デハナイカ」来提示该经历或见解，借用“确认用法”的形式，将自身的经历或见解作为能与听

者共有的“一般知识“或“共同判断”提示出来。

李凝的“以说方言为主地区的请求表达——以日本山形县三川町地区为例”在调查山形县三川町方言的请求句的基础上，指出了它与日语标准语的不同点。在作者所调查的三种场景中，三川町方言的话者倾向于采用直奔主题的方式，较少使用前置表现；呼唤词较多使用方言中的对称；具体的请求句多使用方言的简体形式；“请求部分”经常用“命令形”和“询问形”，而同样情境下标准语中一般不用“命令形”。方言调查可以使我们了解语言变体的多样性，从不同角度重新认识日语标准语的一些语言现象。

本辑还收录了一篇探讨译介学研究思路的论文。胡稹的“论译介学研究与文本翻译研究之关系——以《新编汉日—日汉翻译教程》与该教程所收‘论译介学与翻译研究空间的拓展’一文为个案”认为译介学从内容上，大致可以分为不依赖文本翻译研究的研究和需依赖文本翻译研究的研究，这两类研究中，文章的主体或重点可以有所不同，但译介学研究中的文本翻译研究在多数情况下不可或缺。作者举出了译介学研究中与文本翻译研究相互交集的几个事例对上述观点进行了阐释，统计分析了“论译介学与翻译研究空间的拓展”一文中提到的研究事例，并结合我国当前译介学的研究现状，进一步强调，大多数的翻译理论工作者应该将工作重点放在结合文本翻译进行研究的译介学研究方面，继续加强文本学习和文本翻译研究。

另外，还有一篇关于日语教学的论文。黄莺的“日语学习动机类型与动机强度的关系——对非日语专业大学本科生的定量考察”运用定量研究的方法，以某大学参加二外和辅修日语学习的本科生为调查对象，采取问卷的方法考察了学生的日语学习动机类型，并分析了学生日语学习动机类型与动机强度之间的关系。文章把问卷问题分为 7 种动机类型，然后运用聚类分析又归为四个主要类型，即文化偏好型、语言爱好型、教育趋向型和实用驱动型。同时，作者总结了学生的意见和建议，针对目前日语教学中所存在的问题，提出了改进的方法。

本辑还收录了三篇书评，一篇是评刘凡夫和樊慧颖所著《以汉字为媒介的新词传播》的书评，由邱根成撰写；一篇是评毛文伟《现代日语助词性机能

辞研究》的书评，作者是马小兵；另一篇是许宗华撰写的评欧文东的《汉日语表达中的物理移动范畴与命名背景》。书评有助于我们及时了解学者们的最新研究成果，对促进学术交流，活跃学术气氛也有很大的帮助。希望今后有更多的质量上乘的书评出现在《日语研究》上。

《日语研究》编委会

目　　录

特约论文

とりたて詞「も」の作用域と否定 …… 沼田善子(1)
現代中国語における〈変化〉事象の捉えかたと構文特徴
—〈断続的変化〉と〈連続的変化〉— …… 古川裕(20)

论　文

非宾格动词结构在日汉语中的表现 …… 王亚新(42)
视点与会话中的主语隐现——以汉日语对比为中心
…… 彭广陆(61)
“言语引用”、“言语行为”、“言语内容”
——表示“语言活动意义”的代表性动词「言う」
的时态形式与表述功能 …… 陈　风(93)
生起相修饰成分与复合动词「V+始める」「V+出す」的共现
…… 彭玉全(113)
「VP+の」的自指转指与后续动词性质的关系
——当「VP+の」构成宾语成分时 …… 黄毅燕(126)
关于「(一+V)する」型汉语动词体的研究 …… 刘　健(139)
试论「デハナイカ」在自然会话中的表达功能 …… 张惠芳(153)
「手術する」与“做手术”、“动手术”
——汉日对比语言学研究小议 …… 续三义(165)
关于引用的本质探讨——以汉日语为研究对象 …… 高　宁(184)

论译介学研究与文本翻译研究之关系——以《新编汉日—日汉翻译教程》与该教程所收“论译介学与翻译研究空间的拓展”一文为个案 …… 胡 稹(200)
以说方言为主地区的请求表达——以日本山形县三川町地区为例 …… 李 凝(213)
日语学习动机类型与动机强度的关系——对非日语专业大学本科生的定量考察 …… 黄 莺(225)

书 评

评刘凡夫、樊慧颖著《以汉字为媒介的新词传播》 … 邱根成(241)
评毛文伟著《现代日语助词性机能辞研究》…… 马小兵(248)
评欧文东著《汉日语表达中的物理移动范畴与命名背景》 …… 许宗华(254)

编者后记 …… (262)
来稿注意事项 …… (264)
英文目录 …… (267)
《日语研究》以往各辑目录 …… (269)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

とりたて詞「も」の作用域と否定

沼田善子（筑波大学）

提要　表示“累加”意思的凸显词「も」在否定句中出现时，其辖域的解释是如何决定的呢？本文拟对此作详细论述。具体来说，对决定否定句中的「も」的辖域和否定的辖域之间的大小关系的条件进行考察后，提出以下观点：

1. 「も」在否定句中出现时，一般来讲，「も」的辖域比否定词的辖域大。
2. 「も」出现在含有否定词的主句中时，与「一緒に」、「伴走する」等表示“共同”动作的副词或谓语同现时，「も」的辖域有可能比否定的辖域小。
3. 「も」出现在目的从句、条件从句、让步从句、原因理由从句或可与这些从句作相同解释的连体修饰从句中时，其辖域有可能比否定的辖域小。此时，必须同时满足以下两个条件：相应的从句不含有主题这一句法条件和基于否定命题的说话者的想法这一语用条件。

キーワード　とりたて詞　作用域　「も」　否定　語用論的条件

0. はじめに

「も」に関する日本語学での研究は質、量共に多くの蓄積があり、詳細に研究されてきている。また、「とりたて」に関しても、近年は多くの研究が発表され、研究が進んだ。

そうした中で、とりたて詞の焦点、作用域に関する研究は益岡(1991)以

降、茂木(1999、2003)、沼田・徐(1995)、沼田(2000b、2001、2006、2009)等で議論されたものの、未だ十分に研究されているとは言い難い。

一方、理論言語学ではKuroda(1965)以降、生成文法の立場からのKato(1985)、外池(1989)、Miyagawa(1997、2005、2007)、Hasegawa(1991、1994a、2005)、長谷川(1994b)、Aoyagi(1998)、青柳(2006)、小林(2009)等、多くの研究が重ねられている。しかし、これらの研究にも、現象の観察の時点から議論の余地を残すものがあり、なお課題が多く残されている。

こうしたことから、ここでは、否定文に現れるとりたて詞「も」の作用域と否定辞「ない」の作用域の相対的な広狭のあり方を取り上げ、とりたて詞の作用域がどのように決まるのかについて、その一端を改めて考えてみたい。

とりたて詞「も」が否定文に現れる時は、「も」の作用域が否定辞の作用域よりも広くなるのが一般的だが、従属節の種類、共起成分等により、「も」と否定辞の作用域が逆の関係となる解釈も可能となることがある。沼田・徐(1995)、沼田(2000b、2001)等でも、主節と一部の従属節の間で、「も」の作用域と否定の作用域の解釈に違いがあり、従属節の場合には多義的になることは述べたが、現象の指摘にとどまり、十分な考察ができなかった。

一方、長谷川(1994)、小林(2009)は、「も」と否定の作用域の解釈で主節と非対称となる従属節を考察し、この現象に対する生成文法の立場からの説明を試みている。これら先行研究の指摘は、興味深く、参考となる点も少なくないが、現象の観察、記述の面で本稿の筆者とは異なる見解があり、そのためこの現象を捉える根本の部分で、なお議論の余地を残していると考える。

そこで、本稿では、「累加」の「も」[①]を取り上げ、改めてこの現象の様相を記述し、この現象には統語論的環境に関する条件に加え、語用論的条件が関与していることを述べる。

---

① 以降は、特に断らない限り全て「も」を「累加」の「も」としては考察を進める。

1. 問題とする現象

考察に入る前に、本稿での「とりたての作用域」の捉え方について簡単に述べておきたい。本稿では、とりたて詞によるとりたての作用域を沼田(2009)等に従い、次のように考えておく。

(1)とりたての作用域①は、とりたて詞文において、当該のとりたて詞によって意味的に影響を受ける文中の範囲であり、当該のとりたて詞を含む最小節中の述語を中心とした範囲で、節境界を越えることはない。また、とりたて詞の分布は、基本的にとりたての作用域の先頭要素か最終要素を表す。述語に後接するとりたて詞は、作用域の末端を示し、作用域の先端は、文脈等の語用論的情報から決定される。述語より前にあるとりたて詞は、作用域の先頭要素に後接し、作用域の先端を示す。この時の作用域の末端は、その要素を含む文の述語である。

(1) のとりたての作用域について、詳しくは沼田(2009)等に譲るが、以下で否定述語と共起する「累加」の「も」を例に、簡単に見ておきたい。

(2) a. 関連製品の生産にも遅れが出ないように万全の策を講じる。

b. 電気計測器の生産の遅れはやむを得ないとしても、(関連製品の生産にも遅れが出)$_{も}$ないように万全の策を講じる。

c. 電気計測器の生産は勿論、(関連製品の生産にも遅れが出ない)$_{も}$ように万全の策を講じる。

(2a)は(2b)、(2c)の二つの解釈があり曖昧である。(2b)は、「電気計測器の生産が遅れることに加え、関連製品の生産に遅れが出る」ことのないように「万全の策を講じる」というのであり、(2c)は、「電気計測器の生産に遅れが出ないことに加え、関連製品の生産に遅れが出ない」ことを目標

---

① 「とりたての作用域」は、沼田(2006、2008、2009 等)で述べた、文脈等からの情報を参照し、とりたて詞により実際に文の意味解釈に影響が及ぼされる範囲として考えておく。従って、青柳(2006:126－127)等のLF部門でのとりたて詞の位置から決定される、とりたて詞が潜在的に意味的作用を及ぼす範囲とは異なる。

に「万全の策を講じる」という。(2b)の「も」は「Xに遅れが出る」の「X」に入るものとして、[自者]「関連製品の生産」と[他者]「電気計測器の生産」を肯定するのに対して、(2c)では「Xに遅れが出ない」の「X」に入るものとして、[自者]と[他者]を肯定しているのである。

つまり同じ(2a)の文でも、(2b)と(2c)の環境では、「も」の[自者]・[他者]の肯定を判断する基準となる「基準述語句」の範囲が異なるのである。この変項Xに[自者]を当てはめた基準述語句の範囲を、「も」によって意味的に影響を受ける文中の範囲として、とりたての作用域と考える。従って、(2b)、(2c)の「も」の作用域は、それぞれ例文中の( )もで示した範囲となる。

また(2b)、(2c)の解釈を「も」の作用域と否定辞「ない」の作用域との相対的な広狭で考えれば、(2b)は「も」の方が狭く、逆に(2c)は「も」の方が広いといえる。

否定述語と共起した場合は、「も」の作用域が否定辞の作用域よりも広くなるのが一般的で、(2b)のような場合は少ない。以下では、この現象について、主節の場合と従属節の場合とに分け、どのような場合に「も」の作用域が否定辞の作用域より狭くなるのかについて考察する。なお、以降は便宜的に否定辞の作用域より広い作用域を「も」の広作用域、否定辞の作用域より狭い作用域を「も」の狭作用域と呼ぶことにする。

2. 主節における「も」の作用域

主節中で「も」が否定述語と共起した場合は、基本的に「も」は広作用域をとる。次のようである。

(3) a. (太郎も誘わなかった)$_{も}$。
　　cf. 他者を誘わず、太郎を誘わなかった。
　　b. ＊(太郎も誘わ)$_{も}$なかった。
　　cf. 他者を誘い、加えて太郎を誘ったのではない。

(4) a. (塩も入れない)$_{も}$。cf. 他のものを入れず、塩を入れない。
　　b. ＊(塩も入れ)$_{も}$ない。cf. 他のものを入れ、加えて塩を入れるのではない。

ただし、共同動作を表す副詞「一緒に」[①]が共起する場合は、次のように「も」が否定辞の作用域より狭い狭作用域をとることができる。

(5) カブトムシを入れた虫かごには、(クワガタも一緒に入れ)$_{も}$なかった。

cf. 虫かごにカブトムシと一緒にクワガタを入れることはしなかった。

(6) 花子は先に友達が遊んでいるところでは、(自分も一緒に遊ば)$_{も}$ない。

cf. 友達が遊んでいるところで、友達と一緒に花子が遊ぶことはない。

(5) は、「も」がとりたてる「クワガタ」の他者を別に考え、「カブトムシを入れた虫かごに他の虫を入れず、クワガタも入れなかった」と解釈すれば、「も」は広作用域となるが、この解釈よりは上に示す狭作用域の解釈の方が自然だろう。また(6)では、「も」の広作用域の解釈はむしろ難しい。

これと関連して、疑問文の中では次の(7)のように「も」の狭作用域解釈がしやすくなり[②]、この環境で(8)のように「一緒に」が共起すると、上でみた狭作用域解釈がさらにしやすくなる。

(7) (太郎も誘わ)$_{も}$なかったの?

cf. 他者を誘い、加えて太郎を誘うことはしなかったか?

(8) カブトムシを入れた虫かごには、(クワガタも一緒に入れ)$_{も}$なかったの?

また同様の環境で、述語動詞の語彙特徴によって、狭い作用域の「も」の解釈がしやすくなることもある。次のようである。

(9) (コーチも伴走し)$_{も}$なかったの? 選手だけでコースを走ったの?

(10) (テオフィリン徐放製剤も追加併用し)$_{も}$なかったの? ステロイ

---

① 「一緒に」は肯定極性を持つ語の一つと考えられ、ここで見た解釈もこの特徴によるものと考えられるが、ここではこれ以上議論しない。

② この解釈の許容度は内省によって揺れがある。

ド剤だけの治療で喘息がよくなったんですか?

ともあれ、上のような場合を除けば、主節中では「も」は広作用域をとると言ってよい。

3. 従属節における「も」の作用域

3.1 Hasegawa(1991)、長谷川(1994b)、小林(2009)

従属節の具体的な考察に入る前に、先に紹介した先行研究の中、ここでの議論と直接関わりのある先行研究 Hasegawa(1991)、長谷川(1994b)、小林(2009)について見ておきたい。

Hasegawa(1991)、長谷川(1994b)は、疑問文と条件節で「も」の作用域が否定辞「ない」の作用域より狭くなる解釈が可能であることを示し、これを理論言語学の立場から統語論的に説明しようとしたものである。「も」と否定辞「ない」の作用域の広狭の解釈が節によって多義的になることを指摘した重要な論考だが、小林(2009)が指摘するとおり、この現象が現れる全てを観察できていない点で課題が残る。

これに対して、小林(2009)は、長谷川(1994b)の考察の不備を指摘し、現象記述を修正した上で、否定文で「は」と「も」が示す非対称性も含め、現象を統一的に扱いうる理論的説明を試みるものである。小林(2009)では興味深い指摘が多くなされるが、次の点で、なお議論の余地がある。

まず、小林(2009)は、この現象について、次の(1)のような例をあげ、「も」が否定辞「ない」の作用域より狭い解釈が義務的になる場合がある(同:127)とする。

(11) [花子が[$_{Plop}$[$_{vP}$箸で　ケーキも　食べ]なかっ]たので]、太郎は驚いた。

[前提:花子は何でも箸で食べる。しかし今日、彼女は箸で(寿司)を食べたが…][ない〉も] (同 2009:126,(11)b)

小林(2009)は、(11)で前提とされるのは「箸で(寿司)を食べた」ことであり、否定されるのは「花子が食べたもの」の集合に「ケーキ」が追加されることで、(11)にはこの解釈しか許されないとする。また、この観察から

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com